

入門的な国際共修授業を通じた

多様な背景をもつクラスメイトとの関係構築

金丸 巧

本稿の目的は、入門的な位置づけの国際共修科目において、多様な背景をもつ学生同士がどのように関係を構築したのかを明らかにすることである。さらに、そうした関係の構築が、学生の国際的な事柄への関心にどのような影響を与えたのかについても考える。分析の結果、学生同士が「個人を知る」という活動を通して感情を伴った交流を繰り返すことによって、確かな関係性の基盤を作ることにつながり、それが、留学や国際的な事柄への関心の高まりへとつながっていくことが示唆された。

キーワード：国際共修，入門科目，関係構築，コミュニケーション

1. はじめに

本稿の目的は、入門的な位置づけの国際共修科目の実践を通して、多様な背景をもつ学生同士がどのように関係を構築したのかを明らかにすることである。さらに、そうした関係の構築が、学生の国際的な事柄への関心にどのような影響を与えたのかについても考えたい。

筆者が勤務する山梨学院大学では、教育目標として「たくましく生きる力」を育成することを掲げている。近年は、教育ビジョンの1つである「全学国際化」のもと、全学的な「Diversity & Inclusion」を推進し、国際共修の理念を理解、実践する大学を目指している。こうした中、多様な背景をもつ学生同士がともに学び合い、教え合う「国際共修」の学びは、学生にとって、母語や母語以外の言語で、目的に応じた意思疎通ができる力を身に付けることにつながり、全学的な国際化を進める上で重要な意味を持つといえる。また、本学が目指す「たくましさ」とは、「『しなやかさ』と表裏一体で発揮される力であり、剛柔を併せ持つ力」（青山2023：1）である。「言語や文化背景の異なる学習者同士が、意味ある交流（meaningful interaction）を図るためには、多様な考え方を共有・理解・受容する『しなやかさ』と、自己を再解釈して共に価値を創造していく『たくましさ』の両者が必要」（青山2023：1）であるということを考えれば、本学における国際共修科目の実践は、教育目標に直結する取り組みであるといえるだろう。

筆者は、これまで入門的な国際共修科目を担当しながら、多様な背景をもつ学生同士の学び合いの様子について実践研究を進めてきた。その中で、これまでに国際的な経験が多くない学生たちにとっては、入門的な国際共修科目が多様な仲間との関係を構築し、その中で新たな価値を創造していくような国際共修の基礎実践力を向上させることに結びついているということが分かった（金丸2023）。そこで本稿では、これまでの実践研究の中で考えてきたこ

入門的な国際共修授業を通じた多様な背景をもつクラスメイトとの関係構築

とを土台とし、多様な背景をもつ学生同士がどのように関係を構築していったのかを明らかにしたい。具体的には、学生たちは、どのような授業活動を通して相互に関心を持ち合い、関係構築が促されていったのか、そして、その関係性が、学生の国際的な事柄への関心にどのように結びついていったのかについても考えたい。また、入門的な国際共修科目の意義について述べたい。

2. 本稿で扱う「入門的な国際共修科目」の概要

まず、本稿で扱う「入門的な国際共修科目」について説明する。この科目は、山梨学院大学の経営学部と法学部に設置されている科目である¹⁾。留学生については、正規生だけでなく、短期留学生として1年間本学に在籍している協定校の留学生も履修可能な科目となっている。

山梨学院大学における国際共修科目は、異なる言語文化背景をもつ学生が相互に対話を積み重ねながら、他者や自己を知り、新たな考えや価値観を創造できる人材育成を目指しており、本稿で扱う科目は、このような目標に到達するための「入り口」にあたる科目であるといえる²⁾。具体的には、自分とは異なる背景をもつクラスメイトに関心を持ち、学生同士の協働を通して共修の学び方を知るとともに、そうした活動における自分の言動について内省できるような力の育成を目指している。

また、本科目の特徴は、異なる学習スタイルによる3タイプのクラスが開講されているということである。1つ目のタイプは、「プロジェクト学習型」である。20名程度のクラス編成で、日本人学生と留学生の割合は、ほぼ1:1となっている。「プロジェクト学習型」は、いくつかのプロジェクト実施を通して、言語・文化が異なるクラスメイトと協働する姿勢や技法を体験的に学ぶクラスである。2つ目のタイプは、「体験ワーク型」である。40名程度のクラス編成で、こちらは日本人学生と留学生の割合は、3:1となっている。「体験ワーク型」は、毎回の「体験ワーク」を通して、言語・文化が異なるクラスメイトと意思疎通を図る経験を重ねるクラスとなっている。3つ目のタイプは、「講義型」である。この授業は100名程度のオンライン授業である。オンラインという特性を活かし、事前課題と授業内の意見交換を通して、言語・文化が異なるクラスメイトと意思疎通を図るための知識や姿勢を修得することを目的としている³⁾。

表2 各回の授業テーマ

	タイプ	クラス数
①	プロジェクト学習型	2クラス
②	体験ワーク型	3クラス (1クラスは法学部開講)
③	講義型	1クラス

このように本稿で扱う国際共修科目には3タイプのクラスがあり、日本人学生については、入学時のガイダンスにて実施される希望アンケートの結果

を、留学生については入学時に行われる日本語クラス分けテストの結果を踏まえて、履修クラスが決定されている⁴⁾。2023年度前期の開講クラスの状況は、表1の通りである。本稿では、2023年度前期に開講されたクラスの内、筆者が担当した法学部開講の「体験ワーク型」のクラスを取り上げる。

3. 先行研究

日本人学生と留学生の関係構築の様子を取り上げている先行研究に関して、留学生生活全体の中での関係構築に着目した研究、大学寮における関係構築に着目した研究、授業における関係構築に着目した研究という3つの観点にもとづき、概観する。

1つ目は、佐々木・張・鄭（2012）である。佐々木らは、中国人留学生へのインタビュー調査を通して、日本での留学生活の中で、「ホスト側の日本人との友人関係構築をめぐってどのような体験をしているのか」（p.104）を明らかにした。その結果、中国人留学生が日本人との友人関係を構築するために行っている工夫や、うまくいかないときの対処の仕方など具体的なプロセスが浮き彫りとなった。その一方で、「受け入れ・ホスト側である日本人からの働きかけについての語りは現れなかった」（p.115）とし、日本人学生と留学生の「両者の動的な相互作用」（p.115）に重点を置いた教育の重要性と、「言語・文化の差を越えて相互が対等的・協働的に参加できる教育活動」（p.115）の必要性を主張している。

2つ目は、実践共同体としての大学寮における日本人学生と留学生の対人関係に着目した出口・八島（2008）である。この研究では、異文化交流を目的とした大学寮で生活する留学生の語りから、その中で繰り広げられている関係構築のプロセスとその課題について明らかにしている。出口らによれば、「個人レベルでは日本人学生と食堂で話したり、日本語の宿題を手伝ってもらったりする関係を築くことに成功」（p.45）しているものの、「集団レベルでは、留学生と日本人学生間には距離が保たれたまま」（p.45）であった。その背景には、日本人学生は、これまでの文化的実践の経験から4年という期間をかけて少しずつ十全の参加者になっていくのに対し、「同様の歴史をもたない留学生にとっては、日本人にとって自明の位置関係の実践が見えにく」（p.45）く、「上下関係の実践や規範は留学生にとって奇異にしか映らず、参加を拒否した後では、彼（女）らが寮文化を変える力にはなりえない」（p.46）という状況がある。その解決に向けて、両者の対話の場を作るとともに、「両者が交流できる新たな文化の生成に、両者共が関われうようなしくみを作っていく」（p.46）が必要であると述べている。

3つ目は、国際共修授業の中での関係性構築の様子を明らかにした高橋（2021）である。高橋は、自身が担当した人権教育をテーマとした国際共修授業の実践を取り上げ、その中で見られた学生の学びを紹介している。国際共修の授業では、言語や文化の異なりから参加者同士の関係性構築が難しくなることを踏まえ、「学生が主体的に参加できる活動を取り入れながら、当事者性を引き出す」（p.104）工夫や、クラス内の言語の問題を解決するために、「学生同士がグループ内で協力できるよう働きかけ」（p.104）などの工夫を行ったという。その結果、「参加者同士が『人権』を1つの切り口として議論を始め、他者とともに学ぶことで、徐々に参加者が他者と学ぶ関係性が築かれていった」（p.104）と述べている。

以上、日本人学生と留学生の関係構築に着目した先行研究の成果を概観した。それぞれ対象としている学生の背景や状況は異なるものの、良好な関係を構築していくためには、日本人学生と留学生の双方がその過程に関わるとともに、双方が当事者性をもって対等な立場で関わろうとする姿勢をもつことが重要であると分かる。一方で、異なる背景をもつ仲間との交流や関わりの経験が多くない学生にとっては、そのような過程はハードルが高いかもしい。本稿では、特に、入門的な科目を履修する学生にとって、どのような活動が関係を構築するきっかけとなり得るのか考えてみたい。

4. 研究方法

本稿で取り上げる実践は、筆者が2023年度前期に担当した国際共修科目（週1コマ全15回）である。履修者は全16名で、学生の出身は、日本、中国、ベトナム、インドネシア、ポーランドであった。また、16名の内、正規生が7名、短期留学生在が8名であり、正規生の内、1年生が5名（全員日本人学生）・2年生が2名（留学生）であった。

ここで取り上げる授業のタイプは、2章で述べた3タイプの内の「体験ワーク型」であり、全15回の各テーマは、表2の通りであった。本稿では、この中から、特に、第3回「他者理解」、第7回「多様性を考える」の回を取り上げ、学生同士がどのようなきっかけで相互に交流を深め、その結果、どのような気づきを得たり、関係性の変化にどのように影響を与えたりしていたのかを分析する。そのために、①学生による振り返り記録、②学期終了時に授業内で実施したアンケート⁵⁾を分析データとして用いた。①は、毎授業後に学生が記録をしたものであり、その日の活動を通して、どのようなコミュニケーションが行われ、その時、学生自身が何をしたのか、何を感じたのかを記述してもらったものである。②は、全15回の授業が終了した際に、15回の授業全体を振り返ってどのような学びがあったのか、学生自身の国際的な事柄への関心がどのように変化したのかを聞いたものである。第1回目の授業では、授業に期待することを聞いており、その回答と、本アンケートの回答を比較することで、学生の考えにどのような変化があったのかを知ることができると考えた。

以上のデータをもとに、多様な背景をもつ学生同士がどのように関わっていたのかを多面的に捉えるように心がけた。尚、本稿で扱う学生による記述や成果物の使用については、事前に研究内容を学生に説明した上で、同意が得られた学生のもののみ使用することとした。

5. 分析結果

ここからは、授業における学生の様子について、1) 「他者理解」の活動、2) 「多様性を考える」の活動、3) 授業開始時の学生の期待と授業最終回の学生の気づき、の3点に焦点を当てて見ていきたい。

5.1. 「他者理解」の活動

第3回目の授業テーマは「他者理解」であった。授業の中では、まず「他者理解」をするために必要な観点や姿勢について講義をした後、3つのワークを実施した。3つのワークは、様々な観点からクラスメイトについて「知る」ことができるように設計したものであった。

まず、ワーク1では、ペアとなった学生（異なる出身同士）へのインタビューを行い、聞き取った内容を「他己紹介」という形で紹介してもらった。紹介の際には、スーパーや書店などで目にする「POP」の形式で相手の特徴やキャッチコピーを表現してもらい、発表時に提示してもらった。「POP」の形式を用いることで聞き取った内容をそのまま伝えるのではなく、自分なりに解釈し、まとめるという作業が入り、相手への理解が進むと考えた。ワーク2で

表2 各回の授業テーマ

授業回	授業テーマ
第1回	オリエンテーション
第2回	自己開示
第3回	他者理解
第4回	やさしい日本語
第5回	効果的な聴き方
第6回	多様性を考える①
第7回	多様性を考える②
第8回	双方向コミュニケーション①
第9回	双方向コミュニケーション②
第10回	合意形成と問題解決①
第11回	合意形成と問題解決②
第12回	協力とリーダーシップ①
第13回	協力とリーダーシップ②
第14回	授業振り返り①
第15回	授業振り返り②

は、ワーク1で聞き取った内容をもとに、相手の「名札」を相互に作成した。この名札は、その後の授業でも毎回使用するものとし、名前だけではなく、その人の個性が伝わるようなデザインにするように伝えた。それぞれが相手の好きな物や特技、国、特徴などを表すイラストを描き、最後に相手へプレゼントをした。ワーク3では、「ことば」の観点から他者を理解するという目的で、留学生の母語で日本人学生が自己紹介を覚え、発表するという活動を行った。普段、日本語を学ぶ側の留学生が、この時は、自分が先生となり生き活きと日本人学生に教える姿が印象的であった。以上の活動を通して、学生は、どのような気づきを得たのだろうか。学生の振り返り記録の記述をいくつか紹介したい。

振り返り記録① ※データ内の下線は筆者。原文のまま掲載。以下同様。

- ・話を深堀することを意識して、質問をするなどしたが、つい相手の話というより、相手の国についての話になってしまうときがあった。最も大切なことは、相手自身のことを知るということなので、そこを気をつけたい。（日本人学生A）
- ・他己紹介はいちばんいんしょうにのこったことです。その時は非常にたのしかったです。相手のことをいっぱい勉強になりました。他者の理解のいい練習でした。（留学生B）
- ・友達とよく自分の考えを伝えて、たのしかったです。それで話して、相手の情報を交換して、仲がよくなりました。（留学生C）

学生らは、これらの活動を通して自分のことを紹介し、お互いに情報を交換し合うことに対して喜びを感じている様子が窺える。それは、お互いの情報を交換することによって、共通点が見つかったり、意外な一面に気づいたりすることができたからであると思われる。また、そのような喜びの体験があったからこそ、学生Aが記しているように、クラスメイトに対して、国ではなく、「相手自身のことを知る」ということの重要性に気づけたと考えられる。

5.2. 「多様性を考える」の活動

次に、第6回と第7回の「多様性を考える」というテーマを扱った授業の様子について紹介したい。この内、第7回の授業では、「私の食文化」について、授業内でミニプレゼンを行った。プレゼンの目的と概要は、図1、図2の通りである。

「多様性」プレゼン②

✓「私の食文化」

◎ 目的

- 食文化の違いや共通点を知る
 - ・国や地域によって、どのような違い／共通点があるのか。
 - その理由は何かを知る
- 同じ国内でも多様性があることに気づく
 - ・国で一まとめにせず、地域による違いにも目を向ける
- 食に関わる「思い出」を通してクラスメイトを知る
 - ・食に関する個人的経験から相手の理解を深める

図1 授業スライド（プレゼンの目的）

プレゼン準備

✓ Padletの個人スレッドにプレゼン内容を入力する

- ・学籍番号下4桁の個人スレッドを探してください。
- ・スレッド内に①～⑤の内容を入力します。

- ① 私の地元のおすすめ郷土料理
- ② 我が家で、お祝いの時によく食べるもの
- ③ 世界最後の日に、食べたいもの
- ④ 今、ハマっている食べ物（料理、食材、お菓子…）
- ⑤ その他（時間があれば）

図2 授業スライド（プレゼンの目的）

このミニプレゼンでは、「食文化」について学生自身の経験を説明し合い、お互いの違いや共通点に気づくとともに、食の思い出を通して、相手への理解を深めることを目的とした。プレゼンは、図2の①～⑤の内容に関連する写真をオンライン掲示板である「Padlet」に掲示し、その写真を提示しながら1対1で実施した。また、プレゼンは、組合せを変えて3回実施し

入門的な国際共修授業を通じた多様な背景をもつクラスメイトとの関係構築

た。学生は、次のような感想を振り返り記録に記述している。

振り返り記録②

- ・料理は文化の大事なようそだと思います。好きな食べ物について話すとき、皆が持ち上がって、楽しかったです。（留学生D）※「持ち上がって」は、「盛り上がって」の意味と思われる。
- ・どんな食べ物が好きなのか食生活を通してどんな環境で育ってきたのか、深く知ることができて、今までよりも相手のことを知ることができた気がしました。（日本人学生E）

テーマは「食文化」であったが、インターネットで調べられるような食文化の紹介ではなく、「私」に特化した内容としたため、クラスメイト自身の好きな食べ物や、食へのこだわりなどが中心となるプレゼンになった。そのため、学生Dや学生Eが記しているように、相手のことをよく知る機会につながったと考えられる。

5.3. 授業開始時の期待と授業最終回の気づき

ここまで2つの授業の様子を紹介した。では、学生は全15回の授業を通して、どのような学びを経験していたのであろうか。この問いに答えるため、第1回目の授業後の振り返り記録の中で質問した「この授業に期待すること」の回答内容と、授業最終回に学生にとってアンケートの結果を紹介したい。まず、授業開始時の期待を表3のように分類した。

表3 授業に期待すること

	項目	具体的な学生の記述例
1	視野の広がり	現在、グローバル化が進んでいるため国際的な視野を持てるようになりたいです。（日本人学生）
2	友人作り	この授業を通じてみんなと友達になることを望む。（留学生）
3	知識の獲得	文化と日本の社会についてもっと知りたいです。他の人の文化についてもっと知りたいです。（留学生）
4	交流	異文化交流を大事にしていきたいです。（日本人学生）
5	自己成長	自分の弱みを乗り越えてみたいです。（留学生）
6	コミュニケーションスキル	積極的に楽しく会話ができるようなコミュニケーション能力などをこの授業でつけられるようにしたい。（日本人学生）
7	スタディスキル	特にプレゼンテーション能力と、他の人が話したときに意見を吸収するリスニング能力が重要です。（留学生）

この中で、日本人学生、留学生両者に多かった項目は、「知識の獲得」であった。多様なクラスメイトとともに学ぶ授業であるという理解のもと、日本や留学生の国の文化に対する知識を獲得し、考え方や視野の広がりを期待する学生が多かった。一方で、「友人作り」は、留学生の多くが記述していたが、日本人学生にはあまり見られなかった。日本で学ぶ留学生にとって、日本人学生との関係を構築することは、大きな目標の1つとなるため、そのような記述が多かったのかもしれない。一方で、授業最終回のアンケートの中で、この授業を受けてよかったと思うことについて尋ねた結果は、以下の通りであった。

授業最終回アンケート結果（抜粋）

- ・ コミュニケーションが上手くなった
- ・ 友達できた、コミュニケーションのスキル勉強できた
- ・ 授業であるのが大前提だが、その中で会話などを楽しみながら学習することが出来た。

抜粋ですのでご指摘するのはどうかと思いましたが、句点の混在と「できた」「出来た」の混在が気になります。

- ・やさしい日本語で日本人との文化交流です。
- ・色んな文化の人とコミュニケーションを楽しむことができたこと。
- ・クラスメイトと多様な文化を共修できたということ
- ・アイスブレイク、グループワークいつも他ひととできた

上記の結果から、多くの学生がクラスメイトとのコミュニケーションや交流ができたことを「よかった」としてあげていることがわかる。また、他の設問で「授業を通して何ができるようになったか」という問いでは、「相手に関心を持つことができた」「クラスメイトの文化や言語を知ること」という選択肢が最も多い回答となった。これらの結果から、授業全体を通して、学生同士が相互に関心をもち、交流を楽しむ中で友人関係を構築することができていたということが窺える。さらに、「海外や国際的なことに関する関心に変化があったか」という設問では、アンケートの回答者13名⁶⁾の内、10名が「はい」と答えており、その理由として、「もっとそれぞれの国に留学したいです。」「新たな友達と出会いのおかげで、欧米やアジアの国々に興味深かったと思います。」「もっと知りたいという興味が生まれてきた。」などクラスメイトを通して海外の国や文化に関心をもつようになったことが分かった。

6. 考察

授業活動を通して学生同士が前向きな姿勢で関係を築き、それが国際的な事柄への関心の高まりへとつながっている様子が分かった。本章では、多様な背景をもつ学生同士が関係を構築する上で重要であった要素を整理してみたい。

学生同士が関係を構築する上で重要な要素は、「個人を知る」ということであった。言語的・文化的背景が異なる他者を知る際には、文化や言葉の違いが強調され、その違いを学んだり、理解を深めたりすることに目が行きがちである。実際、授業開始時の学生の振り返り記録からも、そうした知識を身に付けたいという声が多かった。しかしながら、本実践で重要であったことは、文化や言葉に関する「教科書的」な知識ではなく、「その人」という極めて個別かつ具体的な情報を知り合うということであった。「POP作り」、「名札作り」、「多言語での自己紹介」、「私の食文化についてのプレゼン」のいずれもが、学生個人の経験や考えを浮き彫りにするような活動であったといえる。また、「個人を知る」という活動は、驚きや喜び、楽しさ、うれしさといった感情を引き起こすことにつながっていた。振り返り記録の中でも、そういった感想が随所に見られた。このような、感情を伴ったクラスメイトとの交流は、特に、これまで国際的な経験が多くない学生たちにとって、関係構築の良ききっかけになるはずである。

入門的な国際共修科目において、個々の学生が、文化も言葉もこれまでの生活経験も大きく異なる他者と出会い、その中で「個人を知る」という活動を通して感情を伴った交流を繰り返すことで、とても簡単なきっかけではあるものの、相互に関心を持ち合う確かな関係性の基盤を作ることにつながった。また、その確かな関係性があったからこそ、ぼんやりとした「海外」への憧れではなく、具体的な行動としての留学や国際的な事柄への関心の高まりへとつながっていたということも本実践を通して確認することができた。

7. おわりに

本稿では、入門的な位置づけの国際共修科目の実践を取り上げ、多様な背景をもつ学生同士

入門的な国際共修授業を通じた多様な背景をもつクラスメイトとの関係構築

がどのように関係を構築していったのかを明らかにするとともに、そうした関係の構築が、学生の国際的な事柄への関心にどのように結びついていったのかについて考えた。その結果、学生同士による「個人を知る」という活動が、相互に関心を持ち合う確かな関係性の基盤を作り、留学や国際的な事柄への関心の高まりへとつながっていくということが示唆された。今後、さらに大学の国際化が進み、多様な学生がともに学ぶ機会が増加していくことが予想されるが、国際共修科目が、学生同士が良好な関係を構築する機会となることで、学内の豊かな国際化の推進を後押しすることにつながっていくであろう。

注

- 1) 経営学部においては、全ての学生が1年次の前期または後期に履修することとなっている。法学部においては、選択科目であり、全ての学年の学生が履修することができる。
- 2) 山梨学院大学における国際共修科目のカリキュラム構想の詳細については、トンプソン・原(2022)を参照されたい。
- 3) 法学部においては、「体験ワーク型」のクラスのみが開講されているため、希望アンケートは実施していない。
- 4) クラス内の日本人学生と留学生の割合は、2023年度前期の状況である。
- 5) アンケートは、以下の5つの設問を用意した。①本授業を履修した理由(自由記述) ②本授業を通してできるようになったこと(複数選択) ③本授業を履修してよかったと思うこと(自由記述) ④海外や国際的なことに対する関心の変化の有無(選択) ⑤ ④の変化の内容、である。②については、本授業の目標である、学び合いや協調性、内省力に関する内容を選択肢とした。
- 6) 履修者は16名であったが、3名の学生がアンケートを実施した授業を欠席した。

参考文献

- 青山 貴子(2023). 「たくましさ」と「しなやかさ」を備えた国際共修に向けて 国際共修・語学教育実践, 第2号, 1-1. <https://ygu.repo.nii.ac.jp/records/4054> (2023年10月31日)
- 金丸 巧(2023). 「国際共修マインド」をどのように育むか 第29回大学教育研究フォーラム発表論文集, 133-133.
- 佐々木 泰子・張 瑜珊・鄭 士玲(2012). 中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか — 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究 — 異文化間教育, 35号, 104-117.
- 高橋 美能(2021). 多様なバックグラウンドを持つ学生が共に学ぶ人権教育 — 国際共修授業の効果と課題 — 留学生交流・指導研究, Vol.23, 93-106.
- 出口 朋美・八島 智子(2008). 実践共同体としての大学寮における留学生と日本人学生の対人関係 多文化関係学, 5, 33-47.
- トンプソン 美恵子・原 百年(2022). 国際共修(日本語)を知る 国際共修・語学教育実践, 創刊号, 57-60. <https://ygu.repo.nii.ac.jp/records/3943> (2023年10月31日)

KANEMARU Takumi